様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０２６６

研究課題名（和文）白人政権下の南アフリカで「大英帝国臣民の黒人」　が新たに「想像する共同体」

研究課題名（英文）"Communities　Re-imagined" by Black Imperial Subjects under the White Regime in South Africa

研究代表者
溝口　昭子（MIZOGUCHI, Akiko）

東京女子大学・現代教養学部・准教授

研究者番号：００２９６２０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,700,000円、（間接経費）　510,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は20世紀初頭の南アフリカで、Sol Plaatjeを始めとするアフリカ人知識人たちが、様々なアパルトヘイト法施行によってアフリカ人の諸権利が剥奪されるなか、自分たちが帰属しうる「想像の共同体」（国民国家）を再構築しようとしたその軌跡を明らかにした。かつてのように選挙権を持つ帝国臣民として大英帝国を国民国家に近いものとして「想像」することが困難になった彼らは、大西洋を越えたアフリカ系ディアスポラの「汎アフリカ主義」の影響を受けつつ、自らの歴史、伝統を近代国家の文脈のなかで再構築し、アパルトヘイト国家に代わる共同体を新たに想像しようとしたのである。

研究成果の概要（英文）：This study has clarified a process in which, in South Africa in the early twentieth century, African intellectuals including Sol Plaatje tried to reconstruct their sense of "an imagined community" (a nation state), while newly endorsed Apartheid laws deprived Africans of their rights. Those intellectuals, who as Imperial subjects used to enjoy their voting rights, found it increasingly difficult to "imagine" the British Empire as something akin to their nation, and under the influence of the transatlantic Pan-African movement, attempted, through their reconstruction of their tradition and history in the context of modernity, to re-imagine a community which would replace the apartheid nation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：南アフリカ　大英帝国　想像の共同体　汎アフリカ主義

１．研究開始当初の背景

研究代表者がボーア戦争を扱った南アフリカ文学について研究を行った際に、19 世紀の Cape Liberalism と呼ばれるケープ植民地の非白人同化政策によって、教育を受けたアフリカ人たちが選挙権など様々な「近代化」の恩恵を享受しており、その一人であった Sol Plaatje（南アフリカの代表的アフリカ人ナショナリスト、翻訳家、作家, 1876-1932）のボーア戦争日記 *Mafeking Diary*（死後出版、1973）には、大英帝国に対する大英帝国臣民としての強い帰属意識が見られ、植民地主義と反植民地主義という単純な対立が成立しないことを発見した。この identity の在り方は Benedict Anderson の *Imagined Communities* (1983)で示される「想像の共同体」（国民国家）の概念を理論的枠組みとして用いて考察した結果、選挙権の行使および「活字資本の普及および読者の存在」(国民国家成立の要因）に寄与されるものであることが明らかになった。つまり、大英帝国がこの時代のアフリカ知識人にとって「国民国家」に類するものとして機能していたのである。やがて 20 世紀初頭に非白人の権利が奪われる中で、Plaatje らアフリカ人知識人は大英帝国への信頼を失い、様々なグローバルな反植民地主義運動あるいは汎アフリカ主義思想等などの影響を受けながら、ナショナリストとして新たな nation (国家／国民／民族)のありかたを模索してゆく。そのダイナミズムに研究の価値を見出した。

また、2009 年に Lancaster 大学主催の学会で Black British 作家 Caryl Phillips について発表した際に、その背景にある Paul Gilroy の *The Black Atlantic* (1993)で示される Black Atlantic の概念（アフリカ人およびアフリカ系 diaspora の identity 構築と近代性（modernity）との関連）を学び直し、その概念が 20 世紀初頭の南アフリカ人知識人と汎アフリカ主義との関連を研究する上で有効であることを認識したことも、この研究領域の意義を再確認することに繋がった。

この領域の研究は国外でのみ関連研究が存在する。まず、Sol Plaatje については、その随筆 *Native Life in South Africa* (1916)や小説 *Mhudi* (1930)に関する研究が様々な角度からなされている。

これらの作品にみられる彼の帝国臣民からナショナリストへの意識の移行について、左翼思想、世界の反植民地主義運動、汎アフリカ主義と関連づけて論じたものとしては Elleke Boehmer の *Empire, the National and the Postcolonial, 1890-1920 : Resistance in Interaction* (2002)が最も包括的である。しかし、そこには彼の臣民意識をもっとも強く示す彼のボーア戦争日記 *Mafeking Diary* への言及がほとんどなく、また汎アフリカ主義との関連に関する考察が弱い。

一方で Plaatje の汎アフリカ主義との関係に限るならば Laura Chrisman による *Postcolonial Contraventions: Cultural Readings of Race, Imperialism and Transnationalism* (2003)や "Beyond Black Atlantic and Postcolonial Studies: The South African Differences of Sol Plaatje and Peter Abrahams" (2005)、Annalisa Oboe の"From South Africa to Europe to North America and Back: Sol Plaatje, W. E. B. Du Bois, and the Routes of Romance" (2008) などが挙げられる。また、20 世紀初頭の New African Movement とその旗手であるアフリカ人作家 H. I. E. Dhlomo について、Ntongela Masilela の *The Cultural Modernity of H. I. E. Dhlomo* (2007)などが汎アフリカ主義との関連でその近代性を論じている。これら汎アフリカ主義と当時のアフリカ人知識人/作家の関連を扱った書は基本となる Paul Gilroy の *The Black Atlantic* における近代性の概念を見直しつつ論じているので非常に刺激的であるが、その背景にある「Cape Liberalism に裏付けられたトランスナショナルな想像の共同体」としての大英帝国の存在に関する議論が不十分である。

また、当時のアフリカ人知識人の多くがその著作において英語と母語両方を使用したことと彼らの nation（国家／国民／民族）構築との関連も、上記の研究ではあまり論じられておらず、そこにも着手するべき領域があると思われた。

このような背景からこの分野の研究に進むこととなった。

２．研究の目的

19 世紀末に、Cape Liberalism により「平等な権利を保証された」大英帝国臣民としての意識を強く持っていた Sol Plaatje らアフリカ人知識人たちが、20 世紀初頭のアパルトヘイト的政策で諸権利が奪われる中で、進歩的英国系白人、他国の反植民地運動や米国の汎アフリカ主義との Trans(black) Atlantic な関係を通して、帝国に代わる「想像の共同体」すなわち nation(国家/国民/民族)のあり方をどのように模索していったか。その軌跡を、Plaatje のテクストを中心に扱い、Benedict Anderson や Paul Gilroy などの理論的枠組みを見直しつつ用いて明らかにする。またこの研究で得られた知見を応用した形で彼と同時代のアフリカ人知識人の「想像の共同体」の姿も解明する。その際に、彼らの著作において当時存在した多言語性も視野に入れて論じてゆく。

３．研究の方法

<u>資料・情報収集・翻訳依頼</u>

Plaatje 関連文献を南アフリカ、英国の図書館等で収集し、時間をかけて読み込みつつ、それらを読み解くのに欠かせない理論書、特

に Black Atlantic と植民地近代に関する理論書、およびそれらを用いた南アフリカ文学批評書を購入し読み進めた。

また、自分のテーマに関係のある国内外の学会に積極的に参加し他の研究者と交流を深め、情報交換を行った。また、Plaatje が母語であるツワナ語で書いた文献、特に彼のツワナ語の諺翻訳や Shakespeare のツワナ語翻訳の一部を英語に翻訳する作業をツワナ語の native speaker に依頼した。その過程で Plaatje が英語文献とツワナ語文献では異なる言説を展開していることを確認した。

<u>口頭発表・論文発表</u>

研究で得た知見を日本語および英語で発表し、フィードバックを得た。その際、口頭発表も含め発表用の英語論文を作成する際には、必ず事前に native speaker の添削をうけた。

まず、以前口頭発表した Black British 作家 Caryl Phillips の作品を扱った論文を海外学術雑誌で発表し、その過程で Paul Gilroy の Black Atlantic の概念や Stuart Hall の diaspora の概念を作品解釈の手法として、またアフリカ人とアフリカ系 diaspora の関係史としてより深く理解した。それをふまえ、Sol Plaatje の随筆 *Native Life in South Africa* から小説 *Mhudi* までの彼の「想像の共同体」像の軌跡の考察を行い、海外学会での口頭発表および共編著『終わりへの遡行』にて発表した。

一方で多言語社会南アフリカにおける文学文化のあり方を理解する手始めとして映画 *District 9* についての口頭発表及び執筆を行い、Plaatje の Shakespeare 作品のツワナ語翻訳について学会会報にて発表した。

さらに Plaatje の歴史小説 *Mhudi* を扱った口頭発表および英語論文で、民族主義的な性格づけをされがちな歴史文学というジャンルにおいて、作家が自ら植民地近代との両価的関係を越えた植民地国家とは異なる alternative な「想像の共同体」をいかに構築したかを考察した。

ここで得られた南アフリカの 20 世紀初頭のアフリカ人作家による歴史文学分析の理論的枠組みを用いて、現在 H. I. E. Dhlomo の歴史劇に関する考察を 2014 年 4 月の研究会で発表し 2014 年 6 月末に国内で開催される国際学会で発表する予定である。

４．研究成果

主な口頭発表および論文、著作をテーマ別に分類しつつ研究成果を述べる。

(1) Black Atlantic の概念による Plaatje 解釈

Black British 作家 Caryl Phillips を扱った論文（2010）において、Paul Gilroy の Black Atlantic の概念や Stuart Hall の diaspora の概念を作品解釈の手法としてまたアフリカ人とアフリカ系 diaspora の関係史としても理解したことで、汎アフリカ主義やアフリカ系 diaspora に影響をうけた Plaatje の著作およびその「想像の共同体」像を分析することが可能になった。その結果、2010 年の Oxford の学会発表において、世界のアフリカ人およびアフリカ系 diaspora を連帯させうる Garveyism とその理念を世界的に広め情報を共有することを可能にする機関誌 *Negro World* のネットワークが Plaatje の世界観および「想像の共同体」構築に与えた影響への考察が可能になった。

(2) Plaatje の *Native Life of South Africa* (1916)から小説 *Mhudi* (1930)までの「想像の共同体」の軌跡

主に『終わりへの遡行』における論文「『世界の中心』から『兄弟愛』を叫ぶ--大英帝国と黒い大西洋の交差路で生み出されるソル・プラーキの『想像の共同体』」において、Plaatje 本人が人生の後半に「アフリカ人同胞の苦境を世界に訴えるべく」大西洋を渡り広く旅した diaspora 的な存在であり、それが彼の「黒い大英帝国臣民」から「世界で抑圧され搾取されるニグロたちの一員」への自己認識／自己演出の変遷、そして「想像の共同体」の「大英帝国」から「汎アフリカ主義に基づいた国際的な共同体」への変遷を特徴づけていることを明らかにした。同時に、特に *Mhudi* に見られる「主人公の広く平等な世界への帰属意識」が「伝統社会の崩壊と構成員の diaspora 化と絶え間ない移動」を前提にしているという現象は、原住民土地法によって国内で diaspora 化した民のために、世界を移動しネットワークを構築しながら彼らを代表/表象し続けた Plaatje の世界観の投影であることが解明された。

(3) Plaatje の小説 *Mhudi* (1930)に示された「伝統」と「歴史」、そして alternative な「想像の共同体」像

主に雑誌論文 "'Modern' Tradition and an Alternative 'Imagined' Community in Sol Plaatje's *Mhudi*" (2013)および 2012 年と 2013 年に行われた国際学会での発表にて明らかにされている。Plaatje がこの歴史小説において、民族主義的視点から南アフリカの歴史を語り直し植民地主義的言説を置換しているというのが従来の解釈であった。この研究ではさらに、植民地教育の恩恵を受けてきた作家が汎アフリカ主義の影響を受けつつも植民地近代との両価的関係を内面化していたこと、そして彼が植民地社会の支配-

被支配の二項対立を越えたalternativeな「想像の共同体」を構築する上で、植民地政府に「前近代的な部族社会」として周縁化される「伝統社会」を「自発的に近代社会に向かう柔軟性を備えた共同体」として語り直すことの重要性を明らかにした。その「伝統表象」分析には David Attwell の *Rewriting Modernity* (2006)や Eric Hobsbawm と Terence Ranger による *The Invention of Tradition* (1983)の考察を活用した。

また、現実社会では 1920 年代に原住民行政法によってアフリカ人共同体が「首長」の元に「部族社会化」され、Plaatje らアフリカ人知識人が大衆から切り離され、「大衆を近代化（アメリカの黒人を手本に緩やかな形で）に導き empower する」役割を奪われつつあったことを考慮した場合、作品内で表象される「伝統社会の負の部分」自体を植民地機構の産物として解釈することも可能であることを明らかにした。いずれにせよ、アフリカ人を分断し隷属させ diaspora 化させる植民地近代がもたらす社会とは異なる「もうひとつの想像の共同体」への模索は、Garveyism に影響を受けた、より戦闘的な民族主義の到来をも予見させるものである。

(4) H. I. E. Dhlomo の歴史劇における「想像の共同体」汎アフリカ主義の影響

これは 2014 年の津田塾大学での研究発表を経て、2014 年６月の学会で発表予定である。Plaatje の *Mhudi* の分析で得た手法を用いて同時代のやや若いアフリカ人作家である Dhlomo (1903-1956)の英語歴史劇を分析した。アフリカ人知識人が持っていた Victoria 朝的階級意識、それと矛盾するかのような急進的な汎アフリカ主義が同じテクストのなかでどのような形で共存し、どのような想像の共同体構築をもたらしたかを、当時の白人によるアフリカ人への文化支配（急進的な Garveyism や近代化からアフリカ人を遠ざける懐柔政策）や 1920 年代に台頭していた「Garveyism に影響をうけた、アフリカ系アメリカ人を救世主と見なす大衆の千年王国運動」を踏まえて考察した。

(5) 結論

Plaatje 研究においては、近代的な国民国家とほぼ同義の「想像の共同体」構築には、「伝統社会崩壊と構成員の diaspora 化を前提とした広く平等な世界への帰属」が前提にあること、そして作品では「近代化にふさわしいアフリカ伝統の再創造」が常に行われていたことが明らかにされた。また、当時の南アフリカにおいては、アフリカ人の自発的発展を望まない植民地政府による「再部族化」政策が、アフリカ人知識人の世界観や identity 構築、さらには抵抗の形すらもさらに複雑なものにしていたことが明確になった。

(6) 国内外における位置づけとインパクト

① この時代のアフリカ人作家を研究する研究者や論文は国内では今のところ存在していない。その意味では単なる作家紹介に留まらず、これらの作家の「想像の共同体」像を、Black Atlantic、伝統の創造、植民地近代などの概念と絡めながら論じたこの研究の国内でのインパクトは非常に大きい。

② Black Atlantic と「大英帝国」の間で発生した「想像の共同体」という面だけでなく、当時のアパルトヘイト政策によって捏造された「アフリカ伝統社会」による分断と支配に対して、アフリカ人知識人が、汎アフリカ主義の影響を受けつつ、植民地近代に代わる共同体を想像し、様々な形で抵抗文化創造に繋げようとしていたことに注目したことは海外でも比較的新しい視点である。更に歴史的資料と文化理論による分析が加われば、南アフリカのこの時代の作家研究としてインパクトの大きいものになるであろう。

(7) 今後の展望

① ツワナ語翻訳者の確保やその翻訳作業の遅れによって、今回論文作成までは至らなかったが「創造の共同体」と翻訳（当時宣教師たちによって行われた「アフリカ民族語の文字化」および「その言語でアフリカ人が作品執筆することの奨励」の植民地的側面と近代的側面を含めて）との関連を明らかにする。それによって、当時まだ確立していなかったツワナ語の綴りを研究し、英語とツワナ語間の翻訳を行っていた Plaatje の世界観の包括的理解が可能になる。また多言語社会である南アフリカ社会の民族語作家と英語作家双方の「植民地近代」と「想像の共同体」との関連を考察することで、この時代の文学の包括的な理解が可能になるであろう。

② 当時の南アフリカにおける出版状況、そしてその出版物の傾向、さらにそこに見られる白人と黒人の力関係を考察することで、当時アフリカ人の作品が刊行されるに至る植民地主義的なプロセスを作品理解に繋げることができるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

① MIZOGUCHI, Akiko. “Modern’

Tradition and an Alternative 'Imagined' Community in Sol Plaatje's *Mhudi*." 『黒人研究』、査読有、No.83, 2014, pp.77-89.

② MIZOGUCHI, Akiko. "'Yellow' Skin, 'White' Mask, in Whose Lands?: A Japanese Glimpse of Zimbabwe (1993)." *Coldnoon: Travel Poetics* (International Journal of Travel Writings)、査読有、Vol. 2, No.2, 2013, pp. 181-197.

③ 溝口　昭子、「プラーキ研究、『ジュリアス・シーザー』観劇、ASAUK 学会参加報告」『黒人研究の会　会報』、査読無、No.75, 2013, pp. 4-8.

④ MIZOGUCHI, Akiko. "Moving Around, Moving Between: Mobility and 'Home' in Caryl Phillips's *Strange Fruit*." *The Journal of Commonwealth Literature*、査読有、Vol.45, No.3, 2010, pp. 457-469.

〔学会発表〕（計　7　件）

① MIZOGUCHI, Akiko. "Trajectory of an 'Imagined' Community at the Crossroads of the British Empire and the Black Atlantic in H. I. E. Dhlomo's Historical Plays in the 1930s." 第 60 回黒人研究の会全国大会、2014 年 6 月 29 日（於 キャンパスプラザ京都、京都）（発表確定）

② 溝口昭子、「1930 年代の南アフリカにおけるアフリカ人英語作家の歴史文学を読み直す--H. I. E. Dhlomo の劇作を中心に」津田塾大学言語文化研究所研究会「英語圏文学におけるポストコロニアリズムの可能性」、2014 年 4 月 27 日(於 津田塾大学、東京)

③ MIZOGUCHI, Akiko. "'Modern' Tradition, 'Usable' History and 'Imagined' Community in Sol Plaatje's *Mhudi*." History, Postcolonialism and Tradition：The Postcolonial Studies Association Conference 2013,　2013 年 9 月 12 日　(於 Kingston University, London, England)

④ 溝口昭子、「*District 9* (2009)におけるポストアパルトヘイト時代の喪失、共存、雑種化の行方」津田塾大学言語文化研究所研究会「英語圏文学におけるポストコロニアリズムの可能性」、2010 年 10 月 14 日(於 津田塾大学、東京)

⑤ MIZOGUCHI, Akiko. Rethinking Nationalism: "Re-Imagined Community" in Sol Plaatje's *Mhudi*." African Studies Association of the UK Biennial Conference 2012, 2012 年 9 月 8 日（於 University of Leeds, Oxford, England)

⑥ MIZOGUCHI, Akiko. "Globalizing the Empire, Nation and Native: Marcus Garvey's Information Network from a South African Perspective." Caribbean Globalizations：Genre, Histories, and Cultures, 2010 年 9 月 27 日(於 Maison Francaise and Oriel College, Oxford, England)

⑦ 溝口昭子、「『南アフリカの小さなヴィクトリア女王』が"New Woman"を目指すとき：Olive Schreiner の *From Man to Man* (1926) における性と人種を巡るポリティックス」イギリス女性史研究会第 14 回研究会、2010 年　6 月 12 日(於 甲南大学、神戸)

〔図書〕（計４件）

① 溝口　昭子　他、松伯社『世界の英語を映画で学ぶ』(共著) 2013, pp.110-128 .

② 溝口　昭子　他、英宝社『<終わり＞への遡行--ポストコロニアリズムの歴史と使命』（共編著）(「『世界の中心』から『兄弟愛』を叫ぶ--大英帝国と黒い大西洋の交差路で生み出されるソル・プラーキの『想像の共同体』」) 2012, pp.97-120.

③ 溝口　昭子　他、音羽書房鶴見書店　『オルタナティヴ・ヴォイスを聴く--エスニシティとジェンダーで読む現代英語環境文学１０３選』（共著）2011, pp.30-32、pp.123-126.

④ 溝口　昭子　他、金星堂　『20 世紀英文学研究 IX：現代イギリス文学と場所の移動』（共著）（「英国の応接間から大西洋に漂う筏まで--キャリル・フィリップスの『奇妙な果実』における移動と「故郷」の関係」) 2010, pp.183-202.

〔その他〕（計　0　件）

６．研究組織

(1)研究代表者

溝口　昭子　（MIZOGUCHI Akiko）
東京女子大学・現代教養学部・准教授
研究者番号：00296203

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし